

平成 29 年度 蘇南高等学校 卒業証書授与式 学校長式辞

昨年末より今年にかけて数年に一度という大寒波が襲来し、南木曾岳の雪化粧姿を見ることが多い今年の冬でしたが、ようやく木々の蕾がふくらみ始め、寒風の中にも春めいた香りを感じられる季節となってまいりました。

本日、南木曾町長向井様、大桑村長貴舟様、同窓会長樋口様、PTA会長末松様をはじめとして、日頃、本校に対し格別なご支援をいただいておりますご来賓の皆様のご臨席を賜り、平成 29 年度第 63 回長野県蘇南高等学校卒業証書授与式をかくも盛大に挙行できますこと、大変喜ばしく衷心より御礼申し上げます。

ご列席をいただきました卒業生の保護者の皆様におかれましては、十代後半の多感な時期に際し、今日に至るまでさぞかしご心労、ご苦勞もあったかと存じます。それ故に、本日卒業を迎えられましたこと、感慨深いものがあると拝察するとともに、心よりお祝いを申し上げます。また、本校の教育方針にご理解とご協力を賜りましたことにも心より感謝と敬意を表します。

そして蘇南高等学校第 63 回生として卒業していく 46 名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。平成 21 年度に総合学科として生まれ変わったのち、7 回目の入学生として、勉学に課外活動に成果をあげられました。上級生、下級生に比べると学年生徒数が少なく、生徒会活動、部活動等で困難なことも多々あったと思います。しかし、蘇峡祭で示したリーダーシップ、合唱コンクールでのクラスの団結力、三年時の進路実現に向かう集中力、12 月の総合研究発表会における堂々としたプレゼンテーション、どれをとっても皆さんの力が存分に発揮されていました。皆さんの残した足跡は、下級生の模範となり、そしてこの天白台に受け継がれていくことでしょう。何年か、いや何十年経ってからも構いませんので、この天白台を訪れ、自らが作り上げた成果を確認してほしいと願っています。

さて、皆さんは「ハンナ・アーレント」という 20 世紀を代表する女性哲学者・思想家をご存知でしょうか。1906 年にユダヤ人としてドイツに生まれた彼女は、ヒトラーが政権を掌握した後、ユダヤ人迫害から逃れるためにアメリカに渡りました。1975 年、69 歳でその生涯を閉じましたが、彼女の生涯にわたる研究の目的は、自らが身をもって経験した全体主義の正体を解き明かすことでした。その成果は『全体主義の起源』という大作にまとめられており、彼女の最大の代表的著作となっていますが、本日皆さんに紹介したいものは、それとは別の著作である『人間の条件 (The human condition)』であります。

アーレントはこの著作の中で、人間のより良い生き方を「労働 (labor)」、「仕事 (work)」、「活動 (action)」の三つの言葉を用いて考察しています。まず、労働ですが、これは人間がその生命を持続させるために必要な循環的なもの、すなわち生きるために消費をする行動と定義しました。したがって、食べてしまえばその後には何も残らない行動と言い換えることができます。次に仕事ですが、自然環境と対置する人工的な事物を作り出すことと規定しています。これは人間がよりよく生きるために人工物や制度を創造することであり、かつ人間の死後もその形や概念が残り、社会に有益

なものをもたらされる行動と解釈することができます。最後の活動ですが、人間は孤立した存在ではなく、常に多くの人と対話もしくは対立する存在、すなわち関わりあう存在と考え、その関わり合いそのものを活動と定義しました。そして、彼女は、労働よりも仕事、仕事よりも活動を上位に位置付け、上位になるように生きるべきだと説いたのです。

もう少しわかりやすく例を挙げて説明します。今年度、長野県総合学科合同課題研究発表会において、本校を代表して発表していただいた津野さんの総合研究の内容に即して考えてみます。津野さんは地元南木曾町の食材イタドリに着目して、イタドリの調理方法を考えてくれました。津野さんが作ったイタドリの料理には、イタドリつくね、イタドリを鶏肉と一緒に串刺しにした焼き鳥等がありました。これらは一度食してしまえば消費され形として残ることはありません。これはアーレントの言うところの労働と考えられます。津野さんはこれらのメニューを作るだけでなく、レシピとして残してくれました。津野さんは本日卒業していきますが、このレシピは蘇南高校に、あるいは南木曾町に残り、1年後も10年後も誰でもが美味しいイタドリ料理を食べられるようにしてくれました。これがアーレントの言うところの仕事です。このイタドリの調理方法ですが、津野さんは一人で考案したのでしょうか。直接聞いたわけではありませんが、この調理方法を考案するために、指導担当の先生のみならず、友人とディスカッションしたり、大勢の地元の方々にイタドリに関する話、例えば自生している場所、収穫方法、保存方法、伝統的な調理法等を聞いたり、時には自分の意見を伝えたりしたことでしょう。この人との関わり合い自体が、アーレントが説明するところの人間のより良い生き方につながる活動ということになると考えられます。

津野さんの研究を例に出しましたが、卒業生の皆さんは総合学科高校の特徴である「産業社会と人間」、「総合研究」等を通じて、アーレントの説くより良く生きるための術、すなわち人と関わり合いながら課題を解決していく力を身に着けました。人工知能が今後の社会を大きく変えてしまうとわれ、たかだか十年先すら読めない不安ばかりが大きくなっている時代ですが、本校での探究的な学びの手法を武器に、新しい時代を切り開いてほしいと強く念じる次第です。

本校は昭和28年の創立以来、「開拓者精神」という言葉を掲げ今に至るまで進んでまいりました。ところどころに松の木が生えるつつじやばらいちごなどの藪を切り開き、生徒と地元住民が自らの手でこの天白台に校舎を建築し、学校を作り上げてきたことから「開拓者精神」を掲げることになったと諸先輩より聞いています。今日卒業していく皆さんには、その精神をも受け継ぎつつ、大きく変貌していくであろうこれからの社会において、新たな開拓者として力強く前進してくれることを期待します。総合学科である本校で学び、そしてそこで得た精神を忘れず、自らが流れを生み出していく人であってほしいと切に願っています。

鵬翼を模す本校の校舎のように、大きく翼を広げてこの天白台から飛び立つ63回生の皆さんの前途を祝福し式辞といたします。

平成30年3月1日

長野県蘇南高等学校長
小幡 正樹